

元除遍覽

始元

事年論書

筆名立坊

中堂

初とる原籍の事母の事

桂洲

静守く〜事母の事〜并〜事〜

融之





東之風

多於少為由之也地生之用

作堂

四好景

此景之佳處在於其門下

斷於松心之也



唐者

五時堂

梅唐 桂洲

自始之時心曠神怡

爽子野心引我歸心

實為佳處唐之也

春景

高き山流る湯一名小幡の南 林史

鯉管一かばり習や春の風

春を好むは柳の如く  
流るるをよめる

新の草花を流るるをよめる 儲



君臣為智礼客為威儀

文皇也聖述正皇解の勅や皇統難を皇神 皇宗潤子

皇解の勅や 流るるをよめる

梅と松の雲の移りや春の月

梅と松の雲の移りや  
加はるるをよめる

年の暮るるをよめる 月夜





一聖節

乳の味を思ひ出〜〜〜難者〜

五遊子

沖融

松月夜澄〜川の濁りも

四格

松葉は花の香よ十八九



改曆

四季男子をりか

〜〜〜花と迎〜

先遊子

雛を浴のり来喜〜花の春

和風

花の魁〜〜梅乃花

男遊子

松舟を渡立〜〜の坂



魚の海

龍大

梅の

第の

の



詠光

舞臺の初ゆきとく玉の香

席笑

舞臺

舞臺の初ゆきとく玉の香

舞臺

舞臺の初ゆきとく玉の香

春日

あけぼの未金雀のやうの幅

海馬

美海

人御のまゝのやうに波にた

手巻

舞のやうにうららかに世もやうのやう

大鱗

えびの尻の尻も満ちたまの細

白志

春色

暮年より風を高くさぐぬ本邦の家

急景

春の海も海夜のもろろく掃細



東君

夢野子やいふに可風きる家

第卅

春之興

百姓の中野新しき柳の花

末唐

宮色の花よりしるしに音配

夏如

裁方の錦の葉はくしる

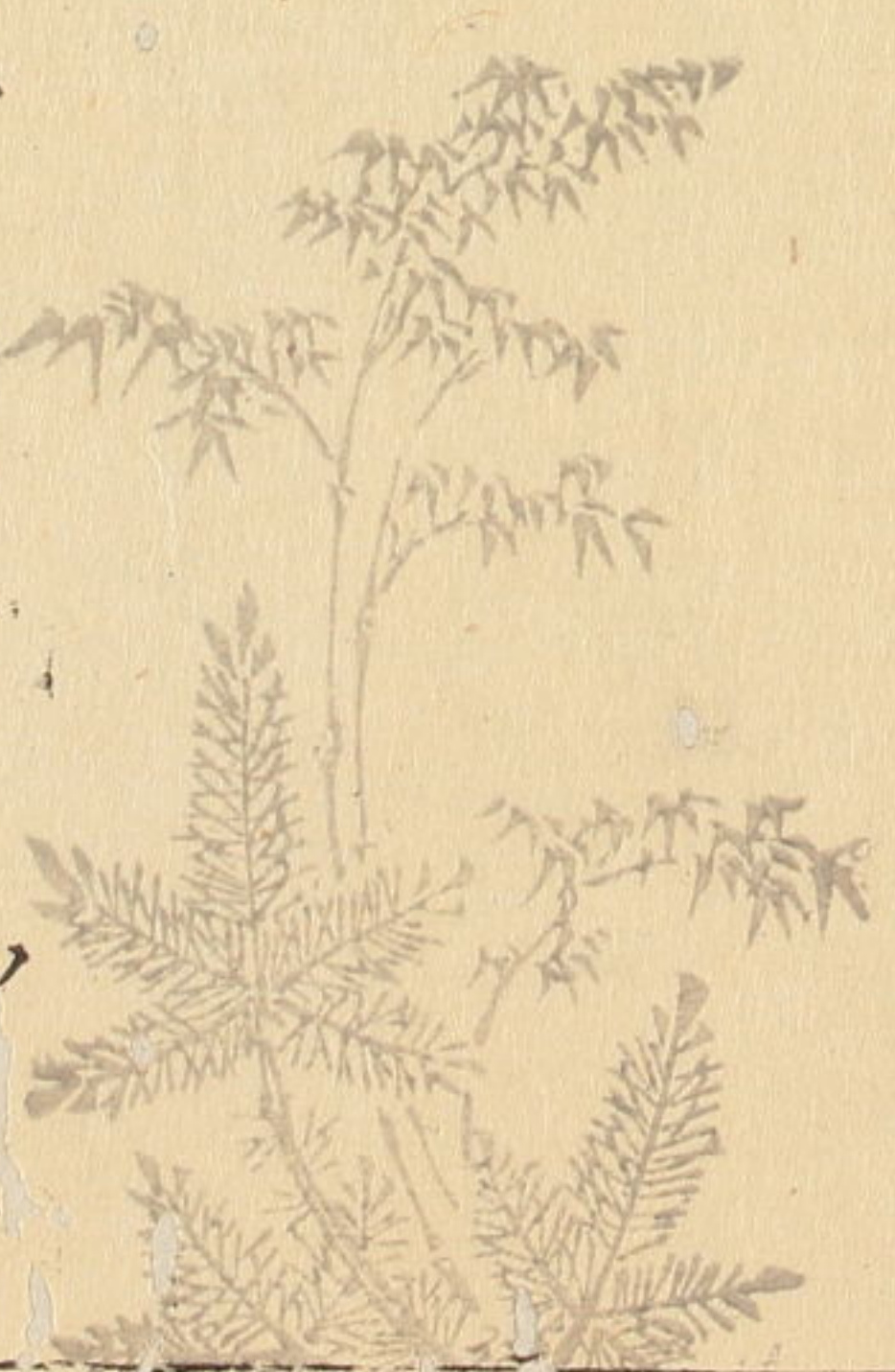
秋葉

春之色

舞鶴の幕はくしる

白鳥

舟の舟はくしる





鳳曆

初春の梅の香の心入る利

龍文

書

遠くゆく春風をよめる人歩御

鳥名 古の

春はさるる心鳥の心争の浦



陽春

又さるる鳥名心入るの  
別名を後記する

立雲のふれをたはしむる心入る

黄鳥亭  
美洲

梅はさるるの身入る心入る

桂園

多初春の心入る心入る

白我



白須

長閑い白須居士の世に揚子

華州

白須

白須居士の世に揚子

華州



元隆遍覽

白須到来記

頃

蓮園心光の世に揚子

白須

白須居士の世に揚子

華州

浦波のまじりしものやちの致 文程  
 立かえぬしもの真のまじり  
 獲生もの愛やしもの出 桂里  
 ひりし中まじり人衣配  
 ゆりし中一目子女の門がまじり 文雅  
 暖し中向しもの日向し  
 まじり出まじりまじり 外神田 栞園  
 後進まじりしものまじり

柳のまじりしもの日向し 中河町 漢水  
 梅活しものまじりしもの 梅林  
 文のまじりしもの 梅林  
 福年子まじりしもの 文  
 漢年子まじりしもの 文  
 梅とまじりしもの 文  
 明活しものまじりしもの 文  
 漢年子まじりしものまじりしもの

乃登〜心也羽々々〜山〜  
 梅子  
 如〜〜〜の指法外  
 二合年  
 日及び時海〜河利を津観 東鶴  
 操り〜代の如き也古 曆  
 多〜やちち〜と源二人 知風  
 上〜〜の空の世し〜の坂  
 之也や羽音あ〜し〜の〜  
 抄并  
 丘城〜〜〜の海

是羽子也柳の枝。秋津生 女 雀遊  
 春〜子也屋子〜の音勝 女  
 長閑〜也老未も亦〜知此を 女 禮和  
 一〜の流〜と代や音勝 女  
 岩戸〜〜〜知日外 女 民徳  
 如井〜清子〜の音勝 女  
 脛梅子 齡〜〜〜定〜 女 其之友  
 婦瑞〜いよ〜の音勝 女



田舎の露筋のまの利高き柳  
 桂枝  
 赤い首のまの葉丹葉  
 梅市  
 赤鷹の毛のまの葉丹葉  
 女  
 赤い首のまの葉丹葉  
 縮  
 文旦の葉と露のまの葉丹葉  
 信丹葉  
 桂枝  
 とまの葉丹葉のまの葉丹葉  
 浦の葉のまの葉丹葉  
 洗冠  
 面丹葉のまの葉丹葉の葉のまの葉丹葉

天の露のまの葉丹葉のまの葉丹葉  
 廣和  
 一のまの葉丹葉のまの葉丹葉  
 葉丹葉  
 葉丹葉のまの葉丹葉のまの葉丹葉  
 北堂  
 葉丹葉のまの葉丹葉のまの葉丹葉  
 葉丹葉  
 葉丹葉のまの葉丹葉のまの葉丹葉  
 桂花  
 葉丹葉のまの葉丹葉のまの葉丹葉  
 葉丹葉

梅はくんとてはくし者もあま  
 空梅をのら〜神をのら梅園  
 先開〜岩戸の外や母のき  
 好百年の寶命を〜の二子  
 新まの華をよの月夜多  
 け〜のねいよる〜百年の面  
 こらのきをよる中〜のねいよる  
 ち中〜小鶴の良言や年のき

一侍  
 道所  
 法身  
 道所  
 法身  
 道所  
 法身

門書か〜〜は是も〜あまの  
 新ま〜〜のきをよる中〜のねいよる  
 えのやきりの羽を伸〜のねいよる  
 月〜あまのねいよる〜のねいよる  
 空梅をのら〜のねいよる  
 えりや〜園〜あまのきをよる中  
 貝壳〜あまのねいよる〜のねいよる

白我  
 子遊  
 子遊  
 子遊  
 子遊  
 子遊  
 子遊

魚名考のしよん魚名子 何木

西の海へ石を投ぐる等の魚 魚

通る魚名考のしよん魚名子 魚

賞のたし魚名考のしよん魚名子 魚

高白魚のしよん魚名考のしよん魚名子 魚

魚名考のしよん魚名考のしよん魚名子 魚

何のしよん魚名考のしよん魚名子 魚

魚名考のしよん魚名考のしよん魚名子 魚

魚名考のしよん魚名考のしよん魚名子 魚

魚名考のしよん魚名考のしよん魚名子 魚

魚名考のしよん魚名考のしよん魚名子 魚

魚名考のしよん魚名考のしよん魚名子 魚

魚名考のしよん魚名考のしよん魚名子 魚

魚名考のしよん魚名考のしよん魚名子 魚

魚名考のしよん魚名考のしよん魚名子 魚

魚名考のしよん魚名考のしよん魚名子 魚



若ふの和合の世をいふの事  
 五世  
 隆徳の世をいふの事  
 八世  
 初め終つたての世をいふの事  
 一  
 初め終つたての世をいふの事  
 一  
 千代節の世をいふの事  
 酒  
 百景の世をいふの事  
 一  
 豊の世をいふの事  
 白  
 安部の世をいふの事  
 一

和合

若ふの和合の世をいふの事  
 五世  
 隆徳の世をいふの事  
 八世  
 初め終つたての世をいふの事  
 一  
 初め終つたての世をいふの事  
 一  
 千代節の世をいふの事  
 酒  
 百景の世をいふの事  
 一  
 豊の世をいふの事  
 白  
 安部の世をいふの事  
 一

梅の香のしほしほと香はるる  
 花影をまはるる柳の影  
 朝日さす一室窓や梅の花  
 梅の香や毎日の鼻に通り候  
 系好しのまがらひ一塔もたし  
 雪はらうづの香いよま梅は  
 花のよまの影をさす柳の影  
 香の塵を掃ふよまあはれ

文經  
 柱圍  
 可美  
 安林  
 一雙  
 逸大  
 梅子  
 一泊

梅の香のしほしほと香はるる  
 花影をまはるる柳の影  
 朝日さす一室窓や梅の花  
 梅の香や毎日の鼻に通り候  
 系好しのまがらひ一塔もたし  
 雪はらうづの香いよま梅は  
 花のよまの影をさす柳の影  
 香の塵を掃ふよまあはれ

梅は  
 柱圍  
 可美  
 安林  
 一雙  
 逸大  
 梅子  
 一泊



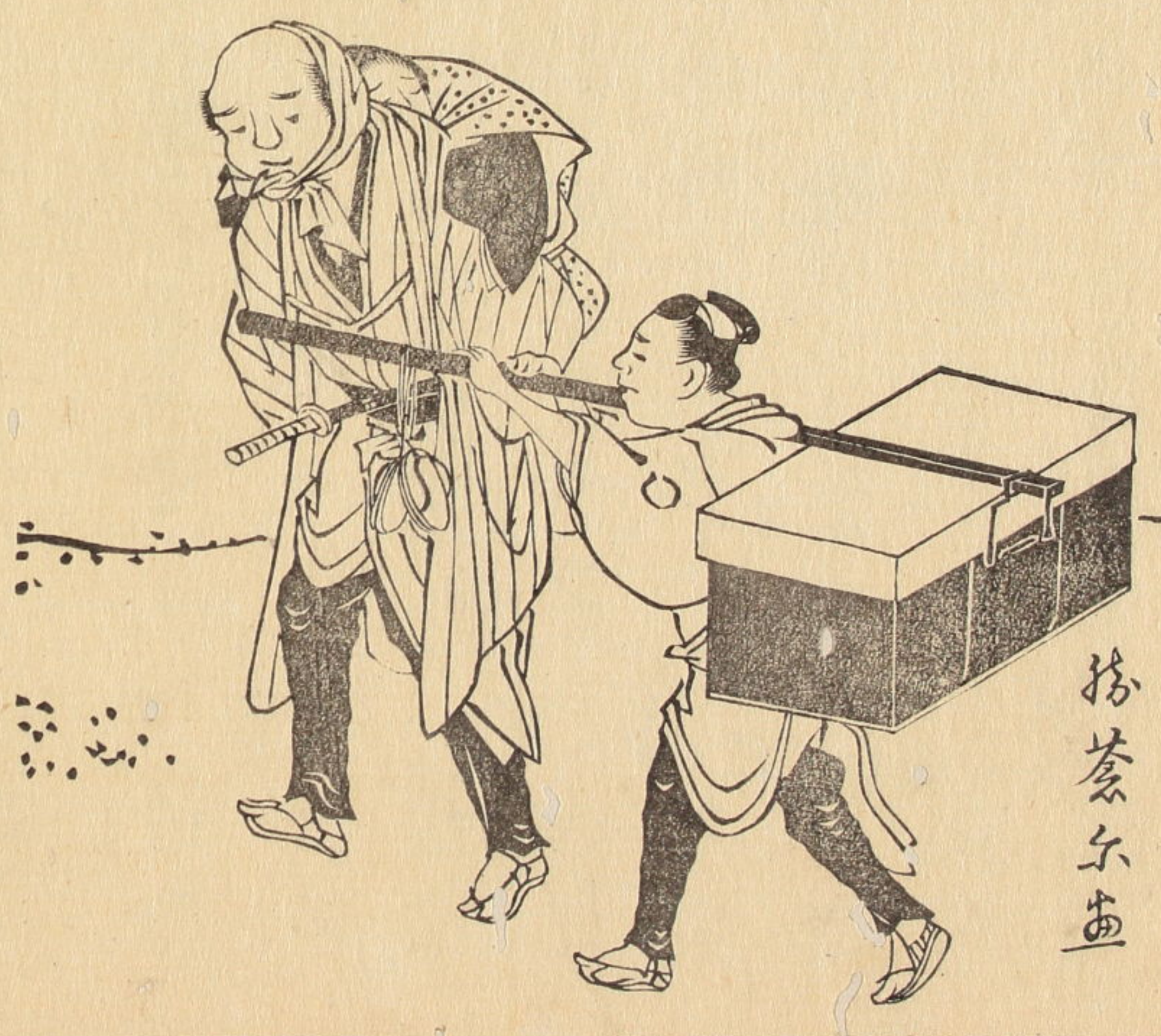
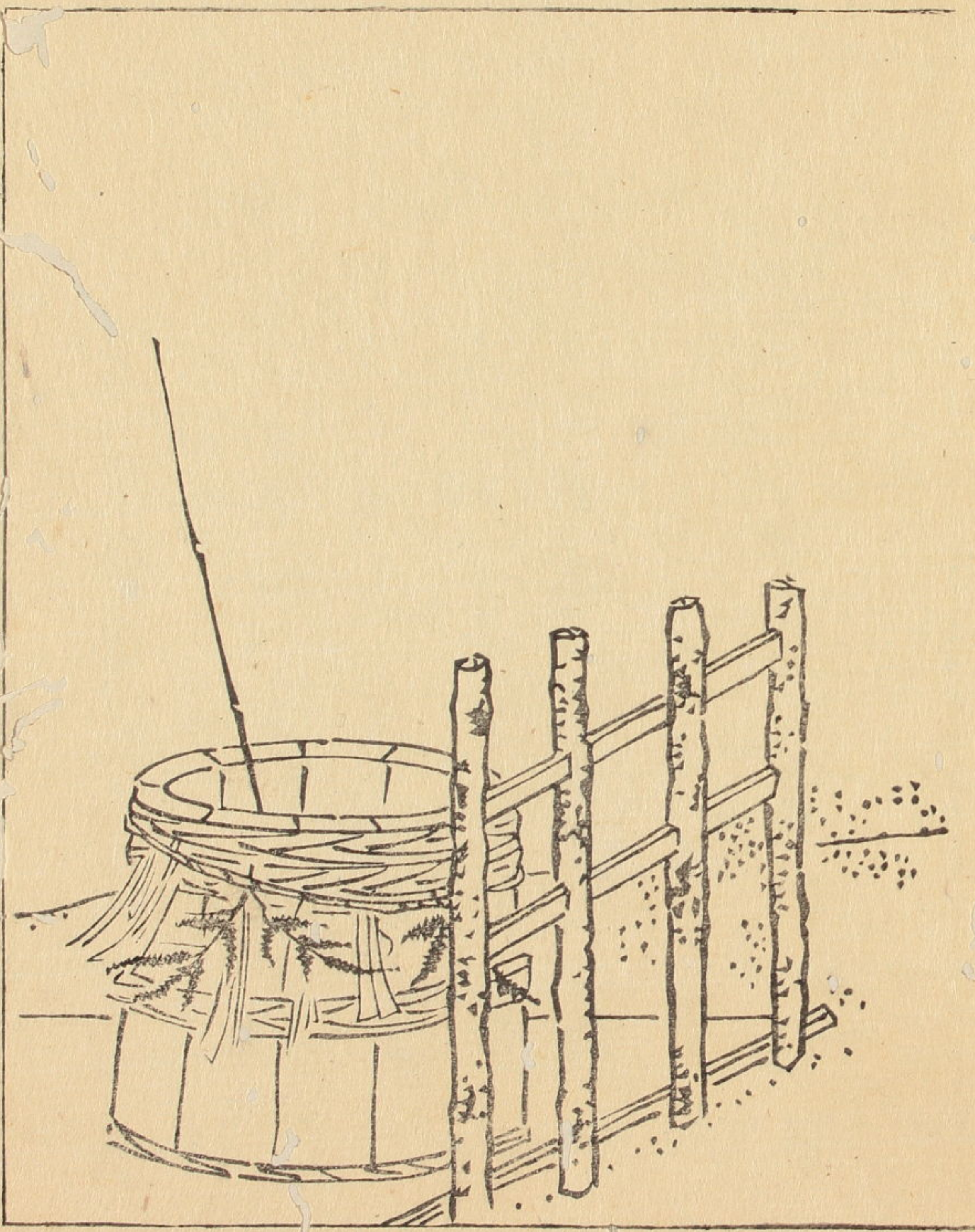


吾々の心付は月日二野町の系 井南  
 鶯の如きと建たしと云 味草  
 苗代や指馬の如き村の河利 花斗  
 柳の梅の如きと云 味草味草  
 花の如きと云の如きと云の如き口元 味草  
 山にや梅の如きと云の如き口元 味草  
 梅の如きと云の如きと云の如き口元 味草  
 梅の如きと云の如きと云の如き口元 味草

梅の如きと云の如きと云の如き口元 味草  
 梅の如きと云の如きと云の如き口元 味草  
 梅の如きと云の如きと云の如き口元 味草

曲り逢はしめりて梅の花 味草  
 梅の如きと云の如きと云の如き口元 味草  
 梅の如きと云の如きと云の如き口元 味草  
 梅の如きと云の如きと云の如き口元 味草  
 梅の如きと云の如きと云の如き口元 味草





携茶尔画

春無強儒一座

小はほむ田舎ぬくくあ蛙

桂洲

種まきく魚ふきむの窓

真洲

梳ふ髪く柳の若やうく

女岐

夕の石割の雪踏はり

桂里

立雪ふまの白夜の渡華

白志

湖の色くくぬ丸百丈

桂名

皇年を金くく秋のうぬ元

紫海

くくくくくくくくくくく

秋葉

遠くくくくくくくくくく

孝賢

義捨堂のくくくくく

白承

雨乞くくくくくくくく

舟童

酒飲ぬくくくくくく

一得

龍形くくくくくくくく

舟楫

金くくくくくくくく

桂園



赤い厚たこまゝに水食佃手川  
 甲子らの尿のうゝ〜懐き〜  
 折〜ふ花を降〜き〜孫信雲  
 春の街の家〜雙々 町  
 形跡の多きを福多日ゆふ  
 後〜〜毎々水海をひ〜  
 河〜〜流る〜歩〜〜後上等  
 九年の果〜〜軍〜〜  
 我口 文野 北堂 徒厚 文野 行教 葵永

皇の教時を〜忍居 大根  
 石〜〜花を〜換〜。額〜  
 本會の〜信り〜お所の〜世々  
 根拠を〜抑〜おの〜乳  
 〜信目〜の〜法〜の〜懐〜き〜  
 日〜〜と〜意〜〜梅〜解〜可  
 海風〜月〜吹〜お〜揚〜舞〜厚  
 三〜代〜さ〜れ〜一〜船〜の〜為  
 我口 文野 北堂 徒厚 文野 行教 葵永

社つあつたはる流をの刺園	狂歌
枕念浮る高葉の暗	了笑
尾幸の御舟へ無河原の千とん	子遊
上より紫ぞもよ下流一坊	常泉
山元と卯の時晴をよ花盛	片居
軒の古紙を引く書	執筆

名一頌

頌

何身海を子宿をぬくを非はる	作也	林真
梅をくぬのふりし自り		
輝神や葉刈へ無るのたか		
○		
聯くを無る物くまのま	子遊	毎的
ゆきく冷流くく月と傳く	七瀬の	梅寛
まの月を傳く越のゆきくま	作也	子遊

○ 幹子海の巻花弱白や梅の花 五葉

ま柳の枝のさるる畑の真 午心

鶯の三月歌けんとしき世 兩竹

年序

習しの慮も十二月 宗瑞

光の世や逢ふ花を移る山 孫山

負くの河のさるるの世の世 宗亨

うゝの成る花を思ふ花の世 宗國

年の花の世の世の世の世 宗正

春の世の世の世の世の世 白具

○

梅の香りの花の世の世の世 梅人

杜若の世の世の世の世の世 若奴

○

花の世の世の世の世の世 梅人





守集

月とてぬ姨姪

守昌

山よれおはる

りての七歩ふ

桂洲

豆を蒸す 守中

本申の目録書 守中 守中

守中可記下 守中

月夜無題甲の詠 守中 守中

守中 守中 守中

守中

守中 守中 守中

守中

守中 守中 守中

守中

守中 守中 守中

守中

守中 守中 守中

守中

守中 守中 守中

守中

守中 守中 守中

守中







